

日本の就学前教育における幼児期運動指針に関する一考察 —アメリカにおける HighScope Preschool Curriculum を参考に—

菅谷 尚平

0 はじめに

ここ最近、児童生徒の運動能力の低下が叫ばれている。栄養面等の点から子どもの発育・発達が早熟化しているものの、この傾向は顕著に表れている。文部科学省が昭和 39 年から国民の体力形成や健康の保持増進のために毎年実施している「体力・運動能力調査」では、昭和 50 年ごろまでは運動能力の向上が確認されていた。しかし、そこから昭和 60 年ごろにかけては体力や運動能力が伸び悩み、それ以降は体力が低下しつつあることや、運動をするタイプとしないタイプの二極化が進んでいることが明らかとなっている。この調査は小学生から高齢者が対象となっているが、その体力などの基礎を養う幼児期においても同様の傾向が全国的に続いていることが想定される¹⁾。実際、日本学術会議が平成 23 年に出した提言「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」では、生活全般の利便性の向上や社会環境の変化により就学前を含む子どもの運動する機会が減少していることをふまえ、幼児期においては基礎的な全身運動を含む遊びを毎日行うことが提唱されている²⁾。

こうした現状を把握しその要因を探ろうとする先行研究は多い。春日（2008）は幼稚園児の身体、25 メートル走、反復横跳び等のデータを分析し、年少・年中間、年中・年長間の運動能力の相関がみられること、3 歳までの家庭での過ごし方が重要であることを述べている。また、田中ら（2014）は関東圏の教育・保育施設の幼児データを用いて運動指導と筋力において、スポーツクラブへの参加と走力において、それぞれ相関があることを示した。そうした運動能力の基礎的運動パターンに注目した吉田ら（2015）は、25 メートル走などの移動系の運動パターンより、ボール投げなどの操作系の運動パターンの方が運動能力との関連が強いとした。

こうした先行研究は多いものの、これを実際の教育・保育の現場でどう実践するかということについて言及した研究は少ない。ここで参考となるのが、文部科学省が平成 24 年に出した「幼児期運動指針」である。この指針では体力・運動能力が低下している現状を受けて、運動の重要性やその方策について具体例を交え述べたものである。しかしこの指針の特徴や課題については指摘した研究は見当たらない。

そこで本稿では、運動能力の向上について述べた幼児期運動指針について考察する。その際、ここではアメリカの就学前教育プログラムである HighScope Preschool Curriculum を参考にする。アメリカでは後述するペリー就学前教育といった幼児期における教育プログラムの開発、評価が盛んである。これらの結果やプログラムは運動能力においても有用な知見を提示しており、我が国においても応用を検討する意義はあると考える。本稿では、ペリー就学前教育の結果を踏まえて執筆された HighScope Preschool Curriculum を参考にする。

本稿の構成は以下の通りである。まず 1-1、1-2 で日本の就学前における要領・指針を確認し、運動能力に着目した幼児期運動指針について概観する。次に 2-1 でペリー就学前教育プロジェクトや

HighScope Preschool Curriculum について概説する。そして、2-2 で HighScope Preschool Curriculum の運動能力にかかわるものを紹介し、3 で考察を行う。

なお、本稿では幼児の運動能力に着目した幼児期運動指針を検討するが、先行研究や指針の記述をふまえて、幼児期を「小学校に入学するまでの3～6歳の3年間」、運動能力を「走る、とぶ、といった今後の発達における基礎となる運動及び道具を用いた動作を行うための能力」と定義する³。

1-1 日本の就学前教育における要領・指針

本節では、主に省庁の政令文書を参考に幼児期における運動能力にかかわる全体的な要領・指針を確認する。最も参考となるものとしては、省庁レベルで就学前教育における方針を示している、幼稚園教育要領、保育所保育指針、があげられる。それぞれの文章では、幼児の教育・保育に関するねらいを5領域に分けて記述しており、運動能力はその中の「健康」にあたる。両者の該当する部分は以下の表1に整理した。

表1 「健康」領域に関する記述

幼稚園教育要領	保育所保育指針
健康 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。 1 ねらい (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。 2 内容 (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。 (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 (3) 進んで戸外で遊ぶ。 (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。 (5) 先生や友達と食べることを楽しむ。 (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。 (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。 (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。	健康 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。 ねらい ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 ③ 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。 内容 ① 保育士等や友達と触れ合い、安定感を持って生活する。 ② いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。 ③ 進んで戸外で遊ぶ。 ④ 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。 ⑤ 健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする。 ⑥ 身の回りを清潔にし、衣類の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする。 せつ ⑦ 保育所における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持って行動する。

(文部科学省、幼稚園教育要領(2008) 厚生労働省、保育所保育指針(2008)より抜粋)

表に記した両者の文章を比較すると、一部表現が違う、一文にまとめられる点等はあるものの同様と
 いうてよい内容であるといえる。平成 11 年度の保育所保育指針ではこの領域の内容の記述は、大きく
 異なっていた⁴。また認定こども園構想が立ち上がり、関連 3 法が制定されたのは平成 18 年である。ゆ
 えに、教育・保育の一体化を目指した認定こども園創設が、この類似性を生む要因になったと考えられ
 る。事実、平成 26 年に告示された幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、健康の領域でも同様の
 の記述がなされている。すなわち、就学前での教育・保育では運動能力にかかわる健康について、同様の
 のねらいをもち、内容も類似しているといえる。

ここでは就学前の教育・保育において、健康面で目指されるものが類似していることを述べた。次節
 では、より運動能力に注目した、文部科学省の幼児期運動指針を参考にする。

1・2 幼児期運動指針の概要

今節では、文部科学省の幼児期運動指針において運動能力向上に資するねらいや方策がどのように述
 べられているかを確認する。この指針では、まず幼児を取り巻く社会の現状と課題が示されている。具
 体的には都市化・少子化の進行により子どもの遊ぶ場所や遊ぶ仲間が減少したこと、交通事故等への懸
 念から体を動かして遊ぶ機会が減少したこと、日常生活において多くの運動量を必要としなくなったこ
 とによる身体活動の軽視、といったことである。次に、幼児期における運動の意義が 5 点述べられてい
 る。列挙すると、①体力・運動能力の向上、②健康的な体の育成、③意欲的な心の育成、④社会適応力
 の発達、⑤認知能力の発達である。そして最後に幼児期の運動の在り方が年齢別に示されている。こ
 れらを記したものが下の表 2 である。

表 2 幼児期における運動の在り方

	運動の発達の特性と動きの獲得の考え方
全 般	幼児期は、生涯にわたって必要な多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切 な時期である。動きの獲得には、「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性がある。「動 きの多様化」とは、年齢とともに獲得する動きが増大することである。幼児期において獲得して おきたい基本的な動きには、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がる などの「体のバランスをとる動き」、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這（は）う、よ ける、すべるなどの「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こ ぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」が挙げられる。通常、これらは、体を 動かす遊びや生活経験などを通して、易しい動きから難しい動きへ、一つの動きから類似した動 きへと、多様な動きを獲得していくことになる。「動きの洗練化」とは、年齢とともに基本的な動 きの運動の仕方（動作様式）がうまくなっていくことである。幼児期の初期（3 歳から 4 歳ごろ） では、動きに「力み」や「ぎこちなさ」が見られるが、適切な運動経験を積むことによって、年 齢とともに無駄な動きや過剰な動きが減少して動きが滑らかになり、目的に合った合理的な動き ができるようになる。次に、目安として幼児期における一般的な運動の発達の特性と経験してお

	きたい遊び(動き)の例について示す。なお、幼児の発達は、必ずしも一様ではないため、一人一人の発達の実情をとらえることに留意する必要がある。
3～ 4 歳	基本的な動きが未熟な初期の段階から、日常生活や体を使った遊びの経験をもとに、次第に動き方が上手にできるようになっていく時期である。特に幼稚園、保育所等の生活や家庭での環境に適応しながら、未熟ながらも基本的な動きが一通りできるようになる。次第に自分の体の動きをコントロールしながら、身体感覚を高め、より巧みな動きを獲得することができるようになっていく。したがって、この時期の幼児には、遊びの中で多様な動きが経験でき、自分から進んで何度も繰り返すことにおもしろさを感じることができるような環境の構成が重要になる。例えば、屋外での滑り台、ブランコ、鉄棒などの固定遊具や、室内での巧技台やマットなどの遊具の活用を通して、全身を使って遊ぶことなどにより、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなどの「体のバランスをとる動き」や、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這(は)う、よける、すべるなどの「体を移動する動き」を経験しておきたい。
4～ 5 歳	それまでに経験した基本的な動きが定着しはじめる。 友達と一緒に運動することに楽しさを見だし、また環境との関わり方や遊び方を工夫しながら、多くの動きを経験するようになる。特に全身のバランスをとる能力が発達し、身近にある用具を使って操作するような動きも上手になっていく。 さらに遊びを発展させ、自分たちでルールや決まりを作ることにおもしろさを見いだしたり、大人が行う動きのまねをしたりすることに興味を示すようになる。例えば、なわ跳びやボール遊びなど、体全体でリズムをとったり、用具を巧みに操作したりコントロールさせたりする遊びの中で、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」を経験しておきたい。
5～ 6 歳	無駄な動きや力みなどの過剰な動きが少なくなり、動き方が上手になっていく時期である。 友達と共通のイメージをもって遊んだり、目的に向かって集団で行動したり、友達と力を合わせたり役割を分担したりして遊ぶようになり、満足するまで取り組むようになる。それまでの知識や経験を生かし、工夫をして、遊びを発展させる姿も見られるようになる。 この時期は、全身運動が滑らかで巧みになり、全力で走ったり、跳んだりすることに心地よさを感じるようになる。ボールをつきながら走るなど基本的な動きを組み合わせた動きにも取り組みながら、「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」をより滑らかに遂行できるようになることが期待される。そのため、これまでより複雑な動きの遊びや様々なルールでの鬼遊びなどを経験しておきたい。

運動の行い方

幼児期は、生涯にわたる運動全般の基本的な動きを身に付けやすく、体を動かす遊びを通して、動きが多様に獲得されるとともに、動きを繰り返し実施することによって動きの洗練化も図られていく。また、意欲をもって積極的に周囲の環境に関わることで、心と体が相互に密接に関連し合いながら、社会性の発達や認知的な発達が促され、総合的に発達していく時期である。

そのため、幼児期における運動については、適切に構成された環境の下で、幼児が自発的に取り組む様々な遊びを中心に体を動かすことを通して、生涯にわたって心身ともに健康的に生きるための基盤を培うことが必要である。

また、遊びとしての運動は、大人が一方向的に幼児にさせるのではなく、幼児が自分たちの興味や関心に基づいて進んで行うことが大切であるため、幼児が自分たちで考え工夫し挑戦できるような指導が求められる。なお、幼児にとって体を動かすことは遊びが中心となるが、散歩や手伝いなど生活の中での様々な動きを含めてとらえておくことが大切である。

これらを総合的に踏まえると、幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、毎日、合計 60 分以上、楽しく体を動かすことが望ましい。また、その推進に当たっては、次の 3 点が重要である。

1) 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること

幼児期は運動機能が急速に発達し、体の基本的な動きを身に付けやすい時期であることから、多様な運動刺激を与えて、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことが大切である。それらが発達することにより、普段の生活に必要な動きをはじめ、とっさの時に身を守る動きや将来的にスポーツに結び付く動きなど多様な動きを身に付けやすくすることができる。そのためには、幼児が自発的に様々な遊びを体験し、幅広い動きを獲得できるようにする必要がある。幼児にとっての遊びは、特定のスポーツ(運動)のみを続けるよりも、動きの多様性があり、運動を調整する能力を身に付けやすくなる。幼児期には体を動かす遊びなどを通して多様な動きを十分経験しておくことが大切である。

体を動かす遊びには、先に挙げたように多様な動きが含まれる。例えば、鬼遊びをすると、「歩く、走る、くぐる、よける」などの動きを、夢中になって遊んでいるうちに総合的に経験することになる。そのため、幼児期には様々な遊びを楽しく行うことで、結果的に多様な動きを経験し、それらを獲得することが期待される。

2) 楽しく体を動かす時間を確保すること

多様な動きの獲得のためには、量(時間)的な保障も大切である。一般的に幼児は、興味をもった遊びに熱中して取り組むが、他の遊びにも興味をもち、遊びを次々に変えていく場合も多い。そのため、ある程度の時間を確保すると、その中で様々な遊びを行うので、結果として多様な動きを経験し、それらを獲得することになる。

文部科学省調査では、外遊びの時間が多い幼児ほど体力が高い傾向にあるが、4 割を超える幼児の外遊びをする時間が一日 1 時間(60 分)未満であることから、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として「毎日、合計 60 分以上」を目安として示すこととした。幼児にとって、幼稚園や保育所などでの保育がない日でも体を動かすことが必要であることから、保育者だけでなく保護者も共に体を動かす時間の確保が望まれる。

なお、幼児が体を動かす時間は、環境や天候などの影響を受けることから、屋内も含め一日の生活において、体を動かす合計の時間として設定した。

3) 発達の特성에応じた遊びを提供すること

幼児に体を動かす遊びを提供するに当たっては、発達の特性に応じて行うことが大切である。幼児

は、一般的に、その時期に発達していく身体の諸機能をいっぱいに使って動こうとする。そのため、発達の特性に応じた遊びをすることは、その機能を無理なく十分に使うことによってさらに発達が促進され、自然に動きを獲得することができ、けがの予防にもつながるものである。また、幼児の身体諸機能を十分に動かし活動意欲を満足させることは、幼児の有能感を育むことにもなり、体を使った遊びに意欲的に取り組むことにも結び付く。

したがって、幼児期の運動は、体に過剰な負担が生じることのない遊びを中心に展開される必要がある。発達の特性に応じた遊びを提供することは、自発的に体を動かして遊ぶ幼児を育成することになり、結果として無理なく基本的な動きを身に付けることになる。

これらを踏まえ、幼児の興味や関心、意欲など運動に取り組んでいく過程を大切にしながら、幼児期に早急な結果を求めるのではなく、小学校以降の運動や生涯にわたってスポーツを楽しむための基盤を育成することを目指すことが重要である。

(文部科学省、幼児期運動指針(2012)より抜粋)

以上が、幼児期運動指針の概要である。次節で内容について検討する。

1-3 幼児期運動指針の特徴

今節では、幼児期運動指針の特徴について検討する。まず注目すべき点は、文部科学省の指針であるものの、幼稚園・保育所を問わない指針となっていることである。認定こども園、幼保一体化の概念が影響を与えていることは先に述べたが、ここでもその潮流をみることができる。実際の就学前の現場でも、教育・保育を問わずに参考となりうるものとなっているといえる。

次に、全般的な内容に加え年齢別に運動の在り方が示されている点をあげることができる。保育所保育指針にも年齢別の児童への配慮事項を述べた部分がみられるが全般的な記述であり、その点は詳細になったといえる。それぞれの年齢に対する記述も鬼ごっこなどの具体例を中心に記述されており、教育・保育者にとっても実践で活用することが可能と考えられる。

3 点目に、「毎日、合計 60 分以上」という時間の目安が設定されていることである。この基準となる時間に関しては、諸外国の指針と共通する点であるとの指摘もある⁵。教育・保育者にとっても時間という形で具体的に計画が立てやすくなったということは注目に値する。

4 点目のとしては、発達に伴う運動の性質を捉え詳細に説明している点があげられる。具体的に「動きの多様化」と「動きの洗練化」を軸に、重心移動を伴う動きと伴わない動き、物体を操作する動きに分類して説明が行われている。また、運動の行い方の発達科学のエビデンスに基づいたものとなっている。それぞれの動きの代表例も示されており、上の 2 つの点と同様に実践に移すことが容易となっている。

以上 4 点がこの幼児期運動指針の特徴として抽出された。だが、その妥当性や課題といった部分については比較しうる資料は日本国内では確認できなかった。また、この指針の課題等に踏み込んだ先行研究も管見の限り見当たらなかった。そこで次章以降でアメリカのペリー就学前教育プロジェクト及びそれをもとにした書籍を確認し、幼児期運動指針との比較を行う。

2-1 アメリカにおけるペリー就学前教育プロジェクトについて

今節では、ペリー就学前教育プロジェクトをふまえた書籍を参考とするにあたり、ペリー就学前教育プロジェクトの概要を確認する。ペリー就学前教育プロジェクトである。概要としては、ランダム化比較試験にて、貧困の家庭に育つアフリカ系アメリカ人の子どもたちを実験群と対照群にランダムに振り分け、幼児教育の介入を行った。実験群の子どもたちは、週に5日午前中は幼稚園に通い、週に2日午後は先生が家庭を訪問し、学校と家庭での子どもたちの様子、子どもたちの発達の促進について話し合った。これが2年間継続され、こうした教育を受けなかった同じ経済的境遇にある子どもたちと就学後にどのような違いが起こるのかを追跡調査⁶している。結果として、5歳時では就学準備、14歳時点では学校の出席と成績、19歳時点では高校の卒業率、そして、27歳と40歳時点では収入や犯罪率や持ち家率、など⁷で、実験群の方が対照群よりも優れた結果をだすことがわかった。10歳の時点ではIQに差はなかった。Heckman (2008, 2013) は分析の中で、IQにさほど変化はなかった一方、学習意欲の伸びが顕著であったことに注目し、このプロジェクトは子どもの非認知能力を高めることに貢献したとしている。また、所得や労働生産性といった観点から、就学前の投資に対する収益率が非常に高いということもこのプロジェクトの考察として述べている。

以上がこのプロジェクトの概要である。この研究結果をふまえて出版されたのが、「HighScope Preschool Curriculum」である。これは8つの分野に分かれており、それぞれの分野における就学前における子どもとのかかわり方を多くの具体例を交えて説明している。今回は運動能力に関する分野である「The HighScope Preschool Curriculum Physical Development and Health」をとりあげる。次節では、関連する部分の内容を概説する。

2-2 運動能力に関する HighScope Preschool Curriculum の概要

今節では、HighScope Preschool Curriculum の運動能力にかかわる部分を概説する。Physical Development and Health の構成は1. 一般的ティーチングストラテジー(General Teaching Strategies) 2. 粗大運動技能(Gross-Motor Skills) 3. 微細運動技能(Fine-Motor Skills) 4. 身体理解(Body Awareness) 5. パーソナルケア(Personal Care) 6. 健康的活動(Healthy Behavior) である。今回は、運動能力と直接の関連が深い1～3章を取り上げる。

まず1章に関しては、この分野全般に通ずる5つの重要なストラテジー及びそれに付随することが述べられているのでそれを以下の表3で紹介する。

表3 一般的ティーチングストラテジー

①「運動技能の発達のための空間を与える」

- ・粗大運動技能が育つために、小さい子どもが広大で自由に動ける場所を確保する。
- ・教室内は障害物が無い状態を保ち、教室外でも自由に遊ばせてあげる。
- ・微細運動技能獲得のためには静かで安全なスペースが必要である。

②「子どもにおもちゃをあげて、運動技能と自力で物事を行う技能を探索し実践させる」

- ・子どもが使いやすい設備やおもちゃは身体技能の発達にとって不可欠である。
- ・そうしたおもちゃは多様かつ豊富にあることで子どもたちは好きなものを選ぶことができ順番待ちをすることもない。
- ・粗大運動技能発達のためには登ったりバランスを取ったりするための器具とボールやロープといった

操作可能な物体が必要である。

③「子どもに時間をあけて1日中運動技能と自力で物事を行う技能を探索し実践させる」

・一日の中で子どもたちは、粗大運動活動は大人数での遊びや外遊びの際に、健康的な食についてはごはんやおやつの際について学ぶというように多くの場面で学んでゆく。

・また、あいさつの時間や移動時間、掃除の時間などの定期的な場面でも子どもたちは身体を使い健康的な実践に取り組む。

④「身体技能と健康な活動を規範とし指導する」

・この時期（幼少期）は、子どもたちは自分のケアや健康的な行動について学び続け、成長し続けているとされている。

・ゆえに、子どもたちに何ができて、どんな技能が発現しているか常に注意せねばならない。

・子どもたちが新しい技能を試す際にそれが成功するように少しずつ手助けをしてあげる。

・適切な課題を設定し、子どもたちの技能を実践させ、意欲を保たせる。その課題は子どもたちをいらいらさせるものであってはならないし、子ども同士を競わせてもならない。

⑤「身体の発達や健康と関わる行動を言語化させる」

・子どもたちが粗大かつ微細な運動の動きを口で説明できるよう手助けしてあげることが重要である。

・大人から新しい言葉を聞き、意味を推測し自らも使っていくことで子どもたちは言語を覚えていく。

次に2章、3章では、粗大運動技能・微細運動技能における、子どもの様子、大人のサポート、さらなる発達のためにできることが記述されている。これらも下の表4、表5で紹介する。

表4 粗大運動技能

	初期	中期	後期
子どもの様子	・単一の移動を伴う運動にとどまる。(歩く、のぼるなど) ・単一の移動を伴わない運動にとどまる。(ひねる、ゆれるなど)	・2つの連続した運動を行う。(膝の曲げ伸ばし、押し引きなど) ・複雑な移動運動を行う。(ジャンプやスキップ)	・3つ以上の連続した運動を行う。(膝、肩、頭に触れることを繰り返す) ・止まったり動いたりしておもちゃを操作する。(空にボールを投げて、走ってキャッチする。)
大人のサポート	・子どもの単純な粗大運動の真似やラベル付けをしてあげる。(「私も腕を振ってみるわ」、「あなたのように歩けるかしら?」)	・子どもの複雑で連続した粗大運動にラベル付けをする。(ジャンプして、これはあなたがやったことだと伝える) ・子どもたちが動いている際にどのように物体を	・子どもに連続して動くという機会を与える。(昼食を待つ間、手をたたいたり、指はじきをさせたりする) ・子どもの複雑な粗大運動を理解する。(「片足ず

		操作しているかをまねして伝える。「君がしたように、2 歩ステップしてボールを蹴るよ」	つで弾んだね！)」
さらなる発達のために	・他の子どもたちの似たような動きに目を向けさせる。「君は腰を回したけど、メリッサは腕を回しているね」 ・子どもたちの動きにバリエーションを持たせる。「膝を高く上げて歩いてみよう！」	・子どもたちの連続した粗大運動について子どもたち自身に話してもらう。「腕を振ってこうすることを何ていう？」	・連続した運動の中に新たな動作を付け加えさせる。「膝を触って、次に肩を触ったね。次は何をしよう？」 ・子どもたちに似たおもちゃを扱わせる。「走っておっきなボールを蹴ったね。小さいボールでもやってみよう！」

表 5 微細運動技能

	初期	中期	後期
子どもの様子	・物体をある程度コントロールし細かい筋肉を使える。(紙を破る、突つつく、粘土をこねる)	・物体をうまくコントロールし細かい筋肉を使っている。(ハサミで切る、線をひく、クレヨンで輪郭を描く)	・力強く、器用に物体をコントロールし細かい筋肉を使っている。(ハサミを使って、ハート形に沿って切り抜く、手紙をしたためる)
大人のサポート	・子どもの微細な筋肉を鍛えるためのおもちゃをあげる。(粘土で異なる形を作る) ・子どもたちの行動をまねする。(ペグボードに大きなペグを置く：頭に帽子を置く)	・手と目の連動を必要とするおもちゃ(ex プラスチックナイフ、木のビーズ、動物のフィギュア)を与える。 ・どのように子どもたちが微細運動技能を使い物事を行っているかを真似して伝えてあげる。(ハサミを使っている際に、「あなたのようにハサミをチョキチョキしているよ」)	・複雑な行動をどのように実行したかを子どもたちに尋ねる。「このレゴの宇宙船の突き出た部分はどやって作ったの？」)

さらなる発達のために	・他の子どもたちが同じおもちゃをどう用いているかに注意を向けさせる。 (「トミー、ペグボードにペグを打ち込んで。そしてそれぞれの頭にさらにペグを打ち重ねてみて」)	・それぞれの手で別のおもちゃを使うようにさせる。 ・子どもたちの微細運動技能を伸ばすためのおもちゃをあげる。(泥、色鉛筆)	・物まねといった課題を提示する。(「きみが描いた他のシルエットを当ててみるよ!」) ・レベルの高いおもちゃを与える (ex ビーズに紐を通す)
------------	---	--	--

以上が一部であるが、3つの章の内容である。これらをふまえて次節で考察を行い、これらの特徴や日本の幼児期運動指針への示唆を探る。

2-3 考察

今節では、前節の HighScope Preschool Curriculum の概要をふまえて、日本の幼児期運動指針と共通する点や相違点を検討する。そして、日本の指針への示唆を考察する。

まず両者で共通する点は、年齢別に記述されている点と発達に伴う運動の性質を捉え説明している点である。これらは主に 2.3 章の表が年齢別になっていることや子どもの様子の欄で、日本の指針と同様に運動能力の発達過程に沿って例や目標が述べられていることからみてとれる。また重心移動を伴う動き、物体を操作する動きなどの区別も、章ごとや文章ごとに区別されており似た内容となっていることがいえる。

次に、相違点としてアメリカのカリキュラムの特徴を2点述べる。まず1点目に、例を交えつつ明確な到達目標が示されている点である。それぞれの年齢や教育・保育者の視点、さらなる発達を見据えた視点から具体的な目標の設定がなされている。これは具体例も豊富であることから実際の現場でそのまま活用することも可能であると思われる。

2点目は、教育・保育者にとって実践に移すことが容易な記述がされている点である。具体例が子どもたちへの問いかけであるといったことから、1点目と重なる部分もあるが活用が容易である。また例示されている運動はもちろん、おもちゃや道具も多岐にわたっており、さらにその使い方も例示されている。ゆえに、このカリキュラムは教育・保育における様々な場面で応用することができると考えられる。

この2点をふまえて、幼児期運動指針を改めて検討する。遊びの例では主に鬼ごっこが具体的に取り上げられている。だが、これは園庭が少ない、幼児の人数が多すぎるといった場合にはうまく実践できない可能性をはらんでいる。また、ブランコなどの遊具やバットなどの道具が複数説明されているが、どのように活用するのかに関しては記述がされていない。また用具などを操作する動きとして、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、などの多くの動作が例示されているものの、こちらも実際の子どもの運動の中でどう活かしていくべきなのかが不明瞭と言わざるを得ない。また教育・保育者の立場からして理解や実践が容易なレベルにあるかは疑問である。実践に即した例が限られているために、現場で活用されないことも想像される。やはり、そうした具体例をより記述することが望まれる。また、子どもの様子が示されることが多くどこまでを目指すのかという基準が定められていない。これに関してもある程

度明確な水準を定め各教育・保育施設で達成に向け実践がなされるような形がより理想的であるといえる。今回はアメリカのカリキュラムを参考にしたが、イギリスの就学前の指針でも明確な到達目標が示されている⁸。

今節では、アメリカのカリキュラムの特徴及び日本の指針への示唆を考察した。幼児期運動指針をさらに実践の即したものとするために、教育・保育者目線での詳細な具体例を複数設けること、運動能力に関する到達目標を明示することの2点が示唆された。

3 おわりに

本稿では、日本の幼児期運動指針に対して、アメリカの HighScope Preschool Curriculum を参考に課題を探った。課題としては、到達目標を明確にすること、具体例を教育・保育者目線で実践が容易となるようにすることがあげられた。

今回参考にした、HighScope Preschool Curriculum¹は行政府が出したものではないため、幼児期運動指針とは性質が異なる部分がある。また、紙面の都合で双方の訳出部分を一部削っている。より性格の似た文章において比較を行うこと、文章全体をふまえた考察を行うことが今後の課題である。

注・参考文献（URL はすべて 2017 年 2 月 9 日に確認。）

・ F Cunha, JJ Heckman 「Formulating, identifying and estimating the technology of cognitive and noncognitive skill formation」 Journal of human resources, vol43, 2008.

・ Ann S. Epstein, PhD 「The HighScope Preschool Curriculum Physical Development and Health」 Highscope Press, 2012.

・ 春日 晃章「幼児期における体力差の縦断的推移：3 年間の追跡データに基づいて」 発育発達研究、第 41 号、2008。

・ 田中 千晶、引原 有輝、安藤 貴史、大河原 一憲、薄井 澄誉子、佐々木 玲子、田中 茂穂
「関東圏在住幼児の体力・運動能力と就学前の保育・教育施設内および施設外における運動・スポーツの実施状況や日常の身体活動量に関する横断的研究」 体力科学、第 63 巻第 3 号、2014。

・ 中室牧子『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2015。

・ 三村 憲一、阿部 恵子、辻本 健彦、北野 裕大、織田 恵輔、原 寛「幼児期における運動能力に関する一考察」大阪教育大学紀要、第 56 巻第 2 号、2008。

・ 吉田 伊津美、森 司朗、筒井 清次郎、鈴木 康弘、中本 浩揮「保育者によって観察された基礎的運動パターンと幼児の運動能力との関係」 発達教育研究、第 68 号、2015。

・ 内閣府、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」、2014。

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/seisyourei/h260430/c1-2-honbun.pdf#search=%27%E8%AA%8D%E5%AE%9A%E3%81%93%E3%81%A9%E3%82%82%E5%9C%92+%E5%AE%B9%E9%87%8F%27>

¹ 例えば、奈良県は小学生の体力テストが全国平均を下回っており、就学前時点での家庭での運動する機会が少ないことが課題とされ、その改善施策が実施されている。
奈良県 HP 「子どもの家庭における生活習慣等の改善」、2011。

(<http://www.pref.nara.jp/secure/56133/23tenken-2.pdf#search=%27%E5%A5%88%E8%89%AF%E7%9C%8C+%E5%B0%B1%E5%AD%A6%E5%89%8D+%E4%BD%93%E5%8A%9B%27>)

² 日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会「子どもを元気にする運動・スポーツの適正実施のための基本指針」、2011、20 頁。

³ 吉田他（2015）は、「生育に伴う運動発達の経過の中で比較的初期（乳幼児期から小学校低学年）に獲得され、その後の運動発達の基礎になるさまざまな運動（運動形態）」を基礎的運動パターンとしている。

⁴ 例えば、平成 11 年度の保育所保育指針では、健康に関して年齢別の配慮の欄に記載されていたものの、全般的なねらい等については記述されていない。

⁵ 引原 有輝、渡邊 将司、石井 好二郎「子どもにおける運動・スポーツの意義とは？ 一身体活動の実施環境とヘルスアウトカムとの関連一」体力科学、vol66、2017、67 頁。

⁶ また、50 歳時点における追跡調査も画策されている。ここでは従来の調査指標に加えて健康測定データや意志力等の非認知能力データなども計測するとされている。若林 巴子「ペリー幼児教育計画ー50 歳時の追跡調査への準備」CHILD RESEARCH NET、2014。(<http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/55.html>)

⁷ 他にも、婚外子を持つ率や所得額においても実験群の方が優れているという結果がある。

⁸ 詳しくは、「Early years foundation stage profile: 2017 handbook」Standards and Testing Agency, 2016.を参照

A Study of Preschool Exercise Guideline in Japan: Referring to HighScope Preschool Curriculum in America-

SUGAYA, Shohei

These days, the decrease of Physical Strength (PS) is a big issue, especially in school days. People say it is important for preschool children to do much exercises. In 2012, the Ministry of Education published 'Preschool Exercise Guideline' (Guideline), which explained the importance of exercise and some examples in preschool.

The purpose of this paper is to study Guideline and to find the problem. In this paper, we refer to 'HighScope Preschool Curriculum' (Curriculum) in America, which is based on results of Perry Preschool Program. We confirmed the contents of Guideline, and found that there are four characteristics. And, we examine Perry Preschool Program and Curriculum.

We found also four characteristics. We found two characteristics are similar that of Guideline and other two are different from Guideline's. We concluded that Guideline should include some standards about PS and much more examples a lot of adults can practice.

